

第13回 日本言語文化学会発表要旨

中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究

許 夏珮

(1996. 12. 7発表)

1. はじめに

初級段階で導入される項目としてテイルの用法があげられるが、中・上級の日本語学習者でもテイルの使い方を間違えることがしばしばある。河先(1994)は、韓国人日本語学習者の作文をデータとして、誤用分析を行い、「中・上級の韓国人日本語学習者はテンス・アスペクトの使い分けについて混乱している。特にテイルの用法の中でも動作の継続を表す用法は習得されにくい」と指摘している。黒野(1995)は、いろいろな言語を母語とする初級日本語学習者を調査の対象とし、テイルの「結果の状態」の用法は「動作の継続」の用法より習得が困難であると結論づけている。これらの研究はテイルの中心的な用法—「動作の持続」と「結果の状態」だけに注目し、それ以外の用法の習得状況について触れていないため、テイルの全体的な習得状況を議論するには不十分である。

本稿では、日本と台湾にいる中・上級台湾人日本語学習者の8種類のテイルの習得状況を「絵を用いたオーラルプロダクション」と「文法テスト」を用いた実験から明らかにする。

2. 研究目的

- I. 中・上級台湾人日本語学習者にとって「結果の状態」の用法は「動作の持続」の用法より習得が困難であるかどうかを検証する。
- II. 中・上級台湾人日本語学習者にとって8種類のテイルの用法の習得難易度を明らかにする。
- III. 学習環境、すなわち、日本で学ぶか台湾で学ぶかにより、テイルの習得に差が生じているかを明らかにする。
- IV. 中・上級台湾人日本語学習者がテイルの用法を誤用する場合、その原因の一つとしての中国語の影響を検討する。

3. 研究方法

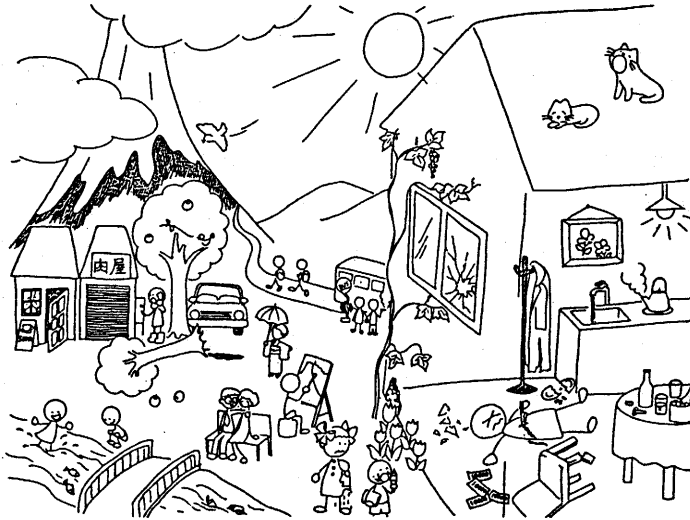
3-1 実験の方法

I. 絵を用いたオーラルプロダクション

「動作の持続」と「結果の状態」を表すテイルの表現を一枚の画面に収め、その絵を被験者に見せ、「この絵を見てできるだけたくさんの文を言ってく

ださい」という指示で内容を自由に口述してもらおう。図1はその絵である。

図1



II. 文法テスト

絵で表せないテイルの習得状況を見るために、文法テストを採用した。テストの形式はテイルの8種類の用法を3文ずつ、動詞の辞書形を与えて、それを自然だと思ふ形に書きかえさせるものである。以下にその例をあげる。

例：①「山下教授をご紹介します。教授は古代史の権威で、これまでにすぐ

れた論文をたくさん(発表する)_____。」 (経歴・経験)

②もしあの飛行機に乗っていたら、みんな(死ぬ)_____。(反実仮想)

③「張さんは(結婚する)_____か。」 (結果の状態)

「はい。子供もいます。」

④今朝、11時まで(寝る)_____。 (動作の持続)

⑤彼は最近毎日(走る)_____。 (習慣・繰り返し)

⑥彼女はお母さんと(似る)_____。 (形容詞的な働き)

⑦彼は車を3台も(持つ)_____。 (慣用法)

⑧父は地方銀行の支店長を(する)_____。 (所属・職業)

調査表は60名の日本語母語話者がテイル表現を85%以上使用している文で構成し、また、被験者にテイル表現についてのテストであることをさとられないように、受け身文や使役文等も6文含め、合わせて30文とした。

3-2 実験の対象

実験の対象は日本と台湾にいる中・上級台湾人日本語学習者各30名である。

3-3 調査期間 1996年7月～9月

4. 結果と考察

4-1 絵を用いたオーラルプロダクション

「動作の持続」の用法と「結果の状態」の用法に関して、台湾と日本で学ぶ学習者の平均正用使用数と平均誤用使用数を観察した。平均正用使用数に関しては、日本で学ぶ学習者が台湾で学ぶ学習者より多かった。しかし、平均誤用使用数に関しては、台湾で学ぶ学習者のほうが少し多かった。このように、平均正用使用数と平均誤用使用数で違う指向が見えたことから、単に発話量の差による違いではなく、日本で学ぶ学習者のほうがテイルが正しく使えていると言えよう。また、用法別で観察すると、平均正用使用数は「動作の持続」の用法のほうが「結果の状態」の用法より多い。平均誤用使用数は逆に、「結果の状態」の用法が多くなる。この結果から、日本と台湾で学ぶ学習者にとって「結果の状態」の用法は「動作の持続」の用法より習得されにくいと言える。これは、黒野(1995)の考察結果と一致している。

4-2 文法テスト

文法テストの分析に際し、用法別の難易度階層と学習者の習得状況が見られる implicational scaling (Hatch&Lazaration, 1991) を使った。表1と表2は日本と台湾で学ぶ学習者の implicational scaling である。

表1 日本で学ぶ学習者

表2 台湾で学ぶ学習者

被験者	経歴 経験	反実 仮想	結果の 状態	動作の 持続	習慣・ 繰り返し	形容詞	慣用法	所属 職業							
1	0	0	1	1	1	1	1	1							
17	0	0	1	1	1	1	1	1							
29	0	1	0	1	1	1	1	1							
28	0	0	0	1	1	1	1	1							
18	0	0	0	1	1	1	1	1							
2	0	0	0	1	1	1	1	1							
13	0	0	0	1	1	1	1	1							
22	0	0	1	0	1	1	1	1							
8	0	0	1	1	0	1	1	1							
12	0	0	0	0	1	1	1	1							
19	0	0	0	0	1	1	1	1							
20	0	0	0	0	1	1	1	1							
21	0	0	0	0	1	1	1	1							
24	0	0	0	0	1	1	1	1							
14	0	0	0	0	1	1	1	1							
5	0	0	0	1	0	1	1	1							
23	0	0	0	1	0	1	1	1							
4	0	0	0	0	0	1	1	1							
6	0	0	0	0	0	1	1	1							
7	0	0	0	0	0	1	1	1							
9	0	0	0	0	0	1	1	1							
10	0	0	0	0	0	1	1	1							
11	0	0	0	0	0	1	1	1							
15	0	0	0	0	0	1	1	1							
16	0	0	0	0	0	1	1	1							
25	0	0	0	0	0	1	1	1							
26	0	0	0	0	0	1	1	1							
27	0	0	0	0	0	1	1	1							
30	0	0	0	0	0	1	1	1							
3	0	0	0	0	0	0	1	1							
Tot	30	29	1	26	4	20	10	16	14	1	29	0	30	0	30

被験者	経歴 経験	反実 仮想	結果の 状態	動作の 持続	習慣・ 繰り返し	形容詞	慣用法	所属 職業								
15	0	0	1	1	1	1	1	1								
28	0	0	1	1	1	1	1	1								
20	0	0	0	1	1	1	1	1								
14	0	0	0	1	1	1	1	1								
7	0	0	1	0	1	1	1	1								
18	0	0	1	0	1	1	1	1								
13	0	0	1	1	0	1	1	1								
4	0	0	0	0	1	1	1	1								
8	0	0	0	0	1	1	1	1								
12	0	0	0	0	1	1	1	1								
21	0	0	0	0	1	1	1	1								
23	0	0	0	0	1	1	1	1								
29	0	0	0	0	1	1	1	1								
16	0	0	0	1	0	1	1	1								
17	0	0	0	1	0	1	1	1								
19	0	0	1	0	0	1	1	1								
24	0	0	0	0	0	1	1	1								
3	0	0	0	0	0	1	1	1								
5	0	0	0	0	0	1	1	1								
10	0	0	0	0	0	1	1	1								
11	0	0	0	0	0	1	1	1								
27	0	0	0	0	0	1	1	1								
28	0	0	0	0	0	1	1	1								
6	0	0	0	1	0	0	1	1								
1	0	0	0	0	0	0	1	1								
2	0	0	0	0	0	0	1	1								
9	0	0	0	0	0	0	1	1								
25	0	0	0	0	0	0	1	1								
22	0	0	0	0	0	0	0	1	1							
30	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1						
Tot	30	0	30	0	24	6	22	8	18	12	7	23	2	28	2	28

表1と表2において、台湾と日本で学ぶ学習者にとってテイルの8種類の用法の難易度は難しい順に、「経歴・経験」、「反実仮想」、「結果の状態」、「動作の持続」、「習慣・繰り返し」、「形容詞的な働き」、「慣用法」、「所属・職業」であることが明らかになった。

それぞれの用法に関してt検定を行った。t検定の結果では、ほとんどの用法において平均値が高く、特に「所属・職業」の用法に関し有意差が見られ、「形容詞的な働き」の用法に関し有意傾向にあることが分かった。他の6種類のテイルの用法では有意差がなかった。

以上、学習環境、すなわち、日本で学ぶか台湾で学ぶかにより、2種類のテイルの用法の習得に差が生じていることが明らかとなった。クローズテストで判定した台湾で学ぶ学習者と日本で学ぶ学習者のレベルはほぼ同じであるが、テイルの用法の一部に有意差、あるいは有意傾向が見られたということは学習環境の違いによる影響があるのではないかと考えられる。

5. おわりに

本研究では、1) 中・上級台湾人日本語学習者にとって「結果の状態」の用法は「動作の持続」の用法より習得が困難であること、2) 台湾と日本で学ぶ学習者にとってテイルの8種類の用法の習得難易度は難しい順に「経歴・経験」、「反実仮想」、「結果の状態」、「動作の持続」、「習慣・繰り返し」、「形容詞的な働き」、「慣用法」、「所属・職業」であること、3) 台湾と日本という学習環境の違いがテイルの習得に影響を与えていること、の3点が明らかになった。今後の課題としては、藤城(1996)が指摘しているムード的な要素が関わっているテイルとテイタについて、より自然に近い言語使用場面での学習者の使用状況・習得状況を考察していきたいと考えている。

参考文献

- (1) 河先俊子(1994)「誤用分析による韓国人学習者のテンス・アスペクトの習得過程の考察」『平成6年度日本語教育学会秋期大会予稿集』
- (2) 黒野敦子(1995)「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87号
- (3) 藤城浩子(1996)「シテイタのもう一つの機能—感知の視点を表すシテイター」『日本語教育』88号
- (5) Hatch, Evelyn and Ann Lazaration (1991) *The Research Manual : Design and Statistics for Applied Linguistics*. Heinle&Heinle Publishers, Boston, Massachusetts.